# ピレモンの手紙

## 概要

著者：　パウロ

執筆年代：　紀元60~61年ごろ

執筆場所：　ローマの獄中（エペソ、ピリピ、コロサイと共に獄中書簡＊）
＊エペソ、コロサイ、ピレモンは、パウロがローマでカイザルに上訴していた軟禁中（使徒28：30）に書かれ、テキコがエペソ、コロサイ、ピレモンをローマから届けた。（エペソ6：21、22、コロサイ4：8）
ピリピはそれ以降、パスターチャックの解説によれば、1回目のヒアリング後のマメルティヌスの牢獄の中で書かれ、エパフロデトによって届けられた。
（ピリピ2：25）

宛先：　ピレモン”friendly one”（コロサイの教会の信者の一人）
教会や牧師や長老にではなく、パウロから、ピレモンへの個人的な手紙
パウロの一番個人的な手紙
でも、なぜ聖書に含まれてるの？
＝神から私たち信者への個人的な手紙として非常に重要な適用があるから

背景：　パウロは、自分の福音伝道によってイエスを信じて救われ、コロサイで家の教会の集まりをしていたピレモンに、オネシモの件で手紙を書いた。当時のローマ帝国下では様々な奴隷がいて、クリスチャンの家でも奉仕人としての奴隷がいることがあった。オネシモは、ピレモンの家で仕えていた奴隷だったが、主人であるピレモンから盗んで逃走してローマに行った。そこで軟禁中のパウロから福音を聞き、クリスチャンとなり、パウロにとっても有益な仕え人となっていた。

テーマ：　イエス・キリストにある平等”Equality”と赦し”forgiveness”
＝これがピレモンの手紙が聖書に含まれてる理由
＝短い手紙だけど、大切なテーマが含まれてる

## １～７節：ピレモンへの愛と信頼の確認

**１、２節：**手紙の著者と宛先
From:
キリスト・イエスの囚人パウロと兄弟テモテ

パウロはローマで投獄中、自分を「キリスト・イエスの囚人”prisoner”」と認識していた。イエス・キリストの福音を異邦人に宣べ伝える器として選ばれ、そのために投獄されていたから。
To:
同労者ピレモン、姉妹アビヤ、戦友アルキポ、家の教会
ほとんどの聖書学者は、コロサイには一つの教会ではなく多くの家の教会があり、そのうちの一つがピレモンの家の教会で、アビヤはピレモンの妻、アルキポはピレモンの息子だと考えています。
**３節：**パウロの典型的な挨拶
父なる神と主イエス・キリストから、（１）恵み（カリス）と（２）平安（シャローム）
必ずこの順番。神の恵みを受け取った後で神の平安（神との平和）があるから。
**４～７節：**パウロとピレモンの相互の愛と信仰の確認
Q. ４節でパウロは、ピレモンを覚え、ピレモンのことで神に感謝していました。なぜですか？
＝（５節）主イエスと（一部でなく）全ての聖徒に対するピレモン”friendly one”の信仰と愛
Q. ある信者の主にある愛の行動や良い行い、生きた信仰の証を聞いたりする時、どんな影響がありますか？励まされたり、慰められたり、自分の信仰がチャレンジされたり、強められたり、祈りと感謝を主に捧げたりしますか？
（＊６節は英語と日本語でちょっと意味が違う）パウロは６、７節で、イエス・キリストにあるピレモンのすべての良い行い”every good thing”とそれを認識する”acknowledge”ことによって、ピレモンの生きた信仰の証がもっと力強く影響を与えるものとなるように、確認し、願っています。これは８節からの個人的な嘆願のための準備です。

**８～２１節：パウロからピレモンへの個人的な嘆願（オネシモへの対応）**
**８～１０節：**オネシモのこと
パウロは使徒であり、ピレモンはパウロの伝道によって救われて信者となった（19節）ので、パウロはその権威を用いて命じることもできたが、「愛によって」個人的に嘆願している。
＝「キリスト・イエスの囚人となっているパウロが獄中で生んだ我が子オネシモ」のこと。
オネシモ
＝**コロサイ４：７～９**「あなたがたの仲間の一人、忠実な愛する兄弟」
コロサイで、ピレモンの家の奴隷であったが、ピレモンから盗んでローマに逃走していた奴隷
ローマで投獄中のパウロによって福音伝道され、救われて信者となった。
**１１節：**
オネシモの名前の意味＝役に立つ、有益#profitable”
救われる前は役に立たないどころか、盗んで損害を与えた者
でも、救われた後は、ピレモンにとっても、パウロにとっても名前通りの者となった
**１２～１３節：**
“I am sending him back.  You therefore receive him, that is my own heart.”
嘆願＝オネシモを送り返すので受け入れてほしい。
パウロが自分のところに留めて福音伝道のために仕えてほしいと思ったほど

**１４節：**
イエス・キリストにある全ての良い行い”good deed”（６節で確認した）は、強制ではなく、自発的でなくてはならない
**１５～１６節：**
当時のローマ帝国のもとでは、逃走した奴隷は重い処罰を受けた。
でも、もはや奴隷ではなく、主にある愛する兄弟としてオネシモを受け入れてほしい。
イエス・キリストにあって、もはや奴隷ではなく、神の家族
**１７節：**
パウロを迎えるように親しい友としてオネシモを迎えてほしい
**１８節：**
オネシモがピレモンにかけた損害、負債はパウロが支払う
＝神に対する罪、神に対する私たちの負債は、イエス・キリストが十字架で支払ってくださった。
**１９節：**
パウロの手紙は、パウロが口頭した内容を誰かが書き留めた代筆の手紙が多かったが、これは個人的な嘆願であり、自筆の手紙。
ピレモンもパウロの福音伝道によってイエスを信じて救われた。
**２０～２１節：**
ピレモンへの従順の確信
「私の心を主にあって元気づけてください」
「私の言う以上をしてくれると知っている」

**８節からここまでで、ピレモンの立場で考えてください。**
ピレモンは、自分の信仰の師であり、愛して尊敬する使徒パウロから、自分から盗み、害を与えた奴隷のオネシモを赦し、もはや奴隷としてではなく、主イエス・キリストにある家族、共に福音のために働く兄弟として受け入れるようにと懇願されました。
この手紙のテーマである、主イエス・キリストにある「平等」と、「赦し」について考えてください。
- **主イエス・キリストにある「平等」について**

神は人を神の似姿に創造されました。**（創世記１：２６、２７）**
神の前で、全ての人は罪人です。**（ローマ３：２３）**
神の前で、全ての人が支払い不可能な負債を負っていました。
神によって赦された方法は皆同じです。**（ローマ３：２４）**
全ての人が主イエス・キリストに代価を支払ってもらいました。
神は全ての人を愛しておられます。**（ヨハネ３：１６）**
主イエス・キリストにあって救われた者は皆同じで、ユダヤ人も異邦人も、男も女も、主人も奴隷もなく、皆が平等です。皆が神の家族で、神に愛されている者です。

＝**コロサイ１：１９～２０、３：１１、エペソ２：１１～１５a、１９、ガラテヤ３：２６～２９**
当時のローマ帝国下では、ユダヤ人、ローマ人、ギリシャ人、男と女、主人と奴隷といった壁がありました。今でも、人と人の間には壁があります。この世の人や社会は、人種、性別、学歴、権力的または経済的地位などによって人を差別します。人と人の間に壁があります。でも、クリスチャンはそうではありません。
＝**ヤコブ２：１～９**
クリスチャニティは人と人の壁を取り除き、皆が平等です。
- **主イエス・キリストにある「赦し」について**

上記の「平等」についてで、神の前には全ての人が罪人で、神に対して支払い不可能な負債を負っていたこと、そしてただ神の恵みにより、イエス・キリストの十字架の代価によって赦されたことを見ました。
Q. 確かに、オネシモはピレモンに損害を与えた奴隷ですが、もしピレモンがオネシモを赦さなかったとしたらどうでしょう？　私たちへの適用で、もし私たちが、自分を傷つけたか、または実際に害を与えた人を赦さなかったとしたら、どうでしょう？
＝**マタイ６：１４～１５、１８：２１～３５**
＝**エペソ４：３２、コロサイ３：１３**
私たちは、神から赦されたように赦すように命じられています。
赦さない罪は、人間関係だけでなく、自分自身も壊してしまいます。
＝**ヘブル１２：１４、１５**
（生きた証＝カルバリーの牧師の赦しの証、チャーリー・カークの妻エリカ・カークの証）
人は皆、罪人でまだ完全ではないので、ピレモンの立場にも、オネシモの立場にも成り得ます。オネシモのように、自分が意図的でなくても人を傷つけたかもしれません。
もしオネシモの立場だったとしたら？
＝**ローマ１２：１８、マタイ５：２３～２５**

パウロは５節で、「全ての聖徒」に対する愛、６節で、「全ての良い行い」を認識するようにとピレモンに確認しました。
私たちはクリスチャン（イエス・キリストのように生きる者）として、この世の人たちとは違い基準で生きています。
基準はイエス様です。

クリスチャンの特徴の一つは、聖霊の実であるアガペの愛＝赦し、一方的に愛する愛です。
特にクリスチャンの間ではそうです。＝**ヨハネ１３：３４、３５**
主がどのように愛して赦してくださったか考えましょう。＝**第一ペテロ４：８**

**２２～２５節：締めくくりの挨拶**

♪♪I could sing of Your love forever ♪♪